

自由論題 2「東南アジアの経済」・報告 2

報告テーマ

タイの経済発展のゆくえ—プーミポン国王が掲げた「足るを知る経済」を手掛かりに—

“The Future of the Thai economic development—The “Sufficient Economy” Thailand’s King Bhumibol Adulyadej advocated”

氏名(所属)

國本 康寿(梅光学院大学)

要旨(800字程度)

本報告の目的は欧米型資本主義に内包されることなく、タイの特性に適した経済発展のゆくえをプーミポン国王が掲げた「足るを知る経済」を通して検証していくことである。

近年、「欲望」の資本主義や欧米型資本主義がグローバル・スタンダード化していく中で世界規模の経済格差の拡大をもたらしたのではないかという論調が随分と増えた。こうした論調は今に始まったことではなく、例えば、ソースティン・ヴェブレンの流れを踏む宇沢弘文は「社会的共通資本」を掲げ、各国・地域のもつ倫理的、社会的、文化的、自然的諸条件が異なるにもかかわらず、市場原理主義に基づく各経済主体の行動が資本主義経済体制の下、人間らしく生活していくことを歪めてきたと言及している。

しかし一方で、今日の東アジアが経済発展を手にしてきた経済システムは欧米型資本主義の流れを得て、経済的危機に見舞われながらも、物質的な豊かさを実現してきたことも事実である。「世界の工場」「世界の成長センター」、そして「世界の市場」として注目を集めている。

東アジアはさらなる物質的な豊かさという果実を手にするために、このまま欧米型資本主義に内包されていくのであろうか。この問いの答えの一つに、末廣昭氏が分析するタイを事例とした市場原理に依拠したタクシン政権下の政府の取組とプミポン国王が掲げた「足るを知る経済」の取組がある。その選択肢を「第一は伝統的な社会制度・組織(王制や仏教)を強化し、タイの価値意識を尊重する『社会的公正の道』である。第二は、伝統的な社会制度・組織を改革し、価値意識も変えていく『現代化への道』である。どちらも、グローバル化、経済の自由化、IT革命の新手という新しい国際環境への対応という点では違いはない」と述べ、加えて、二者択一的ではなく両者へのウェイトの掛け方が課題であるとした。

1997年12月のプミポン国王の誕生日前日の講話の中で述べられた「足るを知る経済」は国家経済社会開発庁がその後の開発計画で基本に据えている。タイの経済発展のための施策はどのような方向性にあるといえるのだろうか。